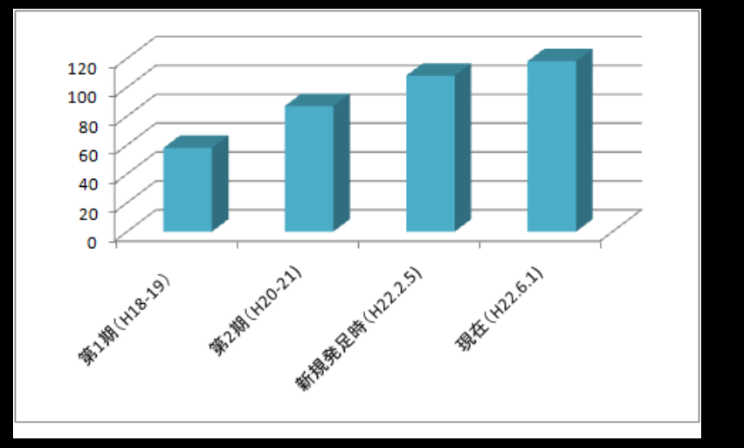
デジタルリポジトリ連合

Digital Repository Federation　平成22年度の活動

＝各参加人数



参加機関： 旭川医科大学, 小樽商科大学, 帯広畜産大学, 北見工業大学, 札幌医科大学, はこだて未来大学, 北海道大学, 北海道教育大学, 室蘭工業大学, 青森県立保健大学, 弘前大学, 岩手大学, 東北大学, 秋田大学, 山形大学, 福島大学, 福島県立医科大学, 茨城大学, 産業技術総合研究所, 筑波大学, 農林水産研究情報総合センター, 物質・材料研究機構, 群馬大学, 跡見学園女子大学, 埼玉大学, 城西大学, 聖学院大学, 文教大学, 千葉大学, 東京歯科大学, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 放射線医学総合研究所, 慶應義塾大学, 駒澤大学, 聖路加看護大学, 東京医科大学, 東京外国語大学, 東京家政大学, 東京工業大学, 東京女子医科大学, 法政大学, 早稲田大学, 関東学院大学, 総合研究大学院大学, 長岡技術科学大学, 新潟大学, 新潟国際情報大学, 新潟青陵大学, 金沢大学, 北陸先端科学技術大学院大学, 福井大学, 都留文科大学, 山梨大学, 山梨県立大学, 信州大学, 岐阜大学, 自然科学研究機構核融合科学研究所, 静岡大学, 静岡県立大学, 浜松医科大学, 愛知教育大学, 名古屋工業大学, 三重大学, 滋賀大学, 滋賀医科大学, びわこ成蹊スポーツ大学, 京都教育大学, 京都工芸繊維大学, 京都府立医科大学, 国際日本文化研究センター, 同志社大学, 立命館大学, 龍谷大学, 大阪大学, 大阪教育大学, 大阪女学院大学・短期大学, 大阪市立大学, 大阪府立大学, 近畿大学, 国立民族学博物館, 関西学院大学, 神戸大学, 神戸市外国語大学, 神戸松蔭女子学院大学, 兵庫教育大学, 奈良大学, 奈良教育大学, 奈良県立医科大学, 奈良女子大学, 奈良先端科学技術大学院大学, 鳥取大学, 島根大学, 島根県立大学, 岡山大学, 広島大学, 広島工業大学, 広島市立大学, 山口大学, 徳島大学, 香川大学, 愛媛大学, 高知大学, 高知工科大学, 九州大学, 九州工業大学, 九州女子大学・九州女子短期大学, 福岡教育大学, 佐賀大学, 長崎大学, 長崎県立大学, 熊本大学, 大分大学, 別府大学, 立命館アジア太平洋大学, 宮崎大学, 鹿児島大学, 沖縄国際大学, 琉球大学

DRF技術ワークショップ

DRFtech-Kyoto 技術と研究が出あうところは
京都大学（平成21年9月7日）

45

谷藤幹子（物質・材料研究機構）
「はじめに」
行木孝夫（北海道大学　准教授）
「Network of Digital Repository in mathematics community」
轟眞一（物質・材料研究機構　主幹研究員）
「セルフアーカイビング事例から読み解く研究情報環境が備えるべき機能」
植田憲一（電気通信大学　教授）
「オンライン学術出版とパーソナルライブラリー」
米田仁紀（電気通信大学　教授）
「Science Repositories：立場，視点，権利，責務」
坂東慶太（My Open Archive）
「草の根リポジトリ活動から見た，学術情報とリポジトリ」
Malte Dreyer（マックスプランクデジタルライブラリー）
「New Phase of eSciDoc – Solution for eScience, Comparison of IR software」
高久雅生（物質・材料研究機構　エンジニア）
「NIMS eSciDoc – A Feedback from Japanese Aspects 」
杉田茂樹，鈴木雅子（デジタルリポジトリ連合）
「“Beyond Institutional Repositories”及び“Beyond Romary & Armbruster on Institutional Repositories” レビュー」
長神風二（東北大学　特任准教授）
「リポジトリからe-Scienceへ：サイエンスコミュニケーターからの提案」
古賀崇（京都大学　准教授）
「IFLA（国際図書館連盟）2009年ミラノ大会参加報告：オープンアクセス関連の発表を中心に」

近畿地区 DRF地域ワークショップ

大阪大学（平成21年9月18日）

29

永井一樹（兵庫教育大学）
「IRのことを考えながら，ILLの仕事をする」

研修
土出郁子（大阪大学）
「使われてなんぼのリポジトリを作ろう」「資料電子化の実際」
中山貴弘（神戸大学）
「著作権処理実務」
前田信治（大阪大学）
「データバックアップ講座」「アクセスログの解析」
大西賢人（京都大学）
「リポジトリのメタデータ概論」

事例報告
岩澤尚子（香川大学）
「リポジトリ後発館から　～事例報告：香川大学の場合」
磯野肇（奈良大学）
「私学でリポジトリ!?　～一人で構築、リポジトリ構築日記」

DRF主題ワークショップ（医学・看護学）

東京慈恵会医科大学（平成21年10月3日）

32

内島秀樹（金沢大学）
「ごあいさつ」

＜講演＞
中木高夫（日本赤十字看護大学）
「EBM時代のリポジトリ」

＜医学系リポジトリの事例＞
東京女子医科大学　**杉山尚子**
東京歯科大学　**阿部潤也**

＜パネルディスカッション。フロアとの意見交換＞
下原康子（千葉県がんセンター患者相談支援センター患者図書室）
新谷益朗（東京歯科大学口腔科学研究センター）
鈴木宏子（千葉大学）
松田真美（医学中央雑誌刊行会）

10

DRF技術ワークショップ軽井沢

国立情報学研究所軽井沢セミナーハウス（平成21年10月7日～10日）

第5回DRFワークショップ

「2009年，いま改めてリポジトリ」
パシフィコ横浜（平成21年11月11日）

319

＜リポジトリがより活用されるために＞
進行：**武内八重子**（千葉大学）
山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター 准教授）
岡田淳子（日本赤十字広島看護大学 准教授）
岩澤尚子（香川大学）

＜これから始める機関のための隣のリポジトリ事情＞
進行：**加藤信哉**（東北大学）
新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部　**高野聡**
広島経済大学　**辻水衣**
九州工業大学　**徳安由希**
長崎県立大学　**永尾仁美**

＜今さら訊けないリポジトリのAtoZ＞　進行：**前田信治**（大阪大学）
久保いくこ（横浜国立大学）
斎藤未夏（筑波大学）
鈴木正紀（文教大学）
土出郁子（大阪大学）
外崎みゆき（関東学院大学）
森一郎（千葉大学）

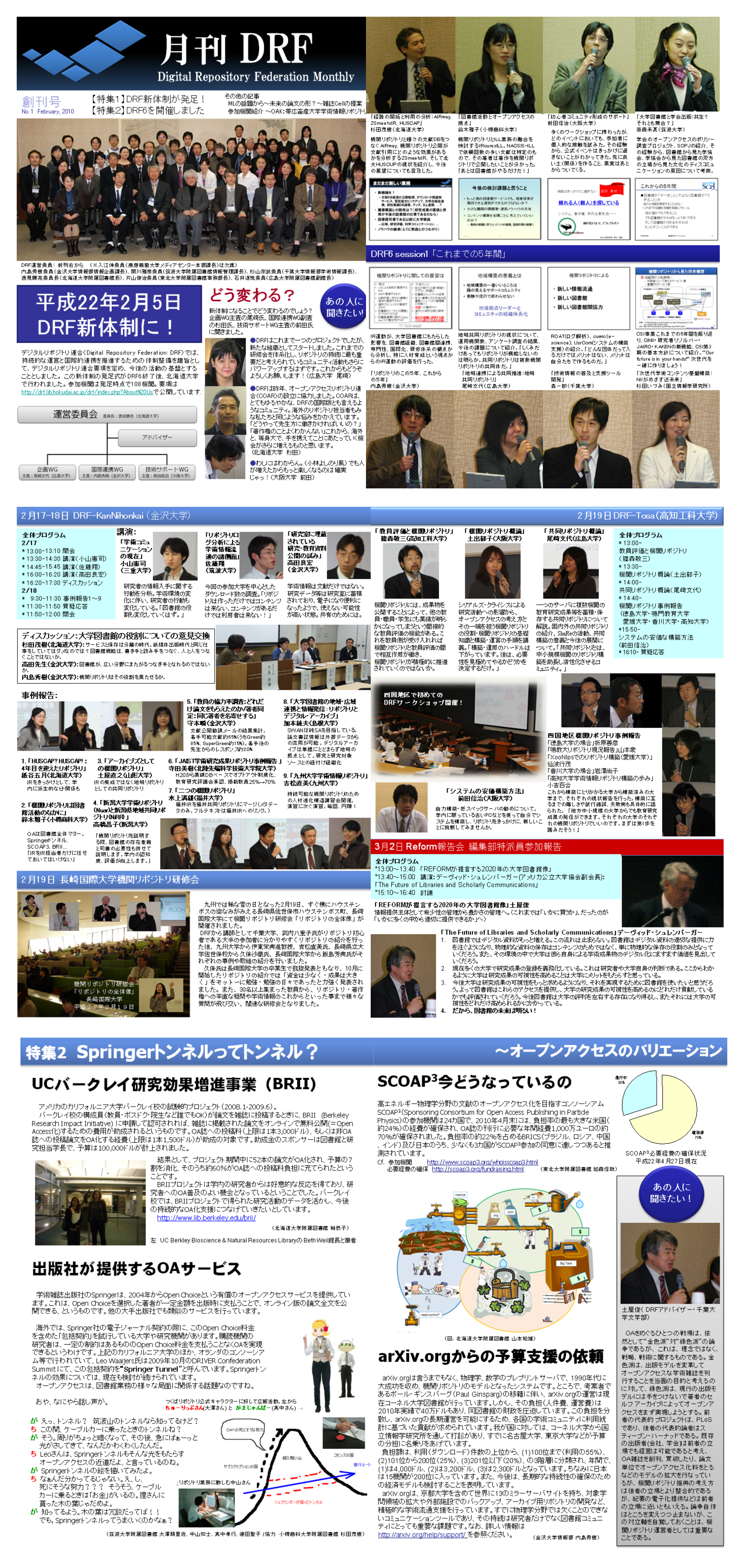
DRF/ShaRe地域ワークショップ兵庫

関西学院大学（平成21年12月17日）

83

＜機関リポジトリ実務講義＞
上田大輔（広島大学）
「概論・コンテンツ収集」
土出郁子（大阪大学）
「メタデータ・著作権」
尾崎文代（広島大学）
「共同リポジトリ概論」

事例報告
神戸大学　**中山貴弘**
関西学院大学　**安本裕和**
兵庫教育大学　**永井一樹**
武庫川女子大学　**安波敬子**
奈良県立医科大学　**鈴木孝明**
鳥取大学　**金子尚登**
中国学園　**いが崎直子**
広島市立大学　**中請真弓**



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

創刊号
No. 1　February, 2010

【特集1】DRF新体制が発足！
【特集2】DRF6を開催しました

その他の記事
MLの話題から～未来の論文の形？～雑誌Cellの提案
参加機関紹介 ～OAK：帯広畜産大学学術情報リポジトリ

DRF運営委員：前列右から　（※入江伸委員（慶應義塾大学メディアセンター本部課長）は欠席）
内島秀樹委員（金沢大学情報部情報企画課長）、関川雅彦委員（筑波大学附属図書館情報管理課長）、杉山宗武委員（千葉大学情報部学術情報課長）、逸見勝亮委員長（北海道大学附属図書館長）、片山俊治委員（東北大学附属図書館事務部長）、石井道悦委員（広島大学附属図書館副館長）

「経路の開拓と利用の分析：AIRway, ZSmeetsIR, HUSCAP」
杉田茂樹（北海道大学）
機関リポジトリと種々の文献DBをつなくAIRway、機関リポジトリ公開が文献引用にどのような効果があるかを分析するZSmeetsIR、そして北大HUSCUPの現状を紹介し、今後の展望についても言及した。

「図書館活動とオープンアクセスの接点」
鈴木雅子（小樽商科大学）
機関リポジトリとILL業務の融合を検討するIRcuresILL。NACSIS-ILLで依頼回数の多い文献は特定のもので、その著者は著作を機関リポジトリで公開したいことが分かった。「あとは図書館がやるだけだ！」

「初心者コミュニティ形成のサポート」
前田信治（大阪大学）
多くのワークショップに携わったが、どのイベントにおいても、参加者に個人的な接触を試みた。その経験から、公式イベントはきっかけに過ぎないことがわかってきた。先に良い土（関係）を作ること、果実はあとからついてくる。

「大学図書館と学会出版：共生？それとも競合？」
斎藤未夏（筑波大学）
学会のオープンアクセスのポリシー調査プロジェクト、SCPJの紹介。その経験から、図書館から見た学協会、学協会から見た図書館の双方の立場から見た文化のディスコミュニケーションの原因について考察。

平成22年2月5日 DRF新体制に！

デジタルリポジトリ連合（Digital Repository Federation: DRF）では、持続的な運営と国際的連携を推進するための体制整備を趣旨として、デジタルリポジトリ連合要項を定め、今後の活動の基盤とすることとしました。この新体制の発足式がDRF6終了後、北海道大学で行われました。参加機関は発足時点で108機関。要項は http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?About%20Us で公開しています。

運営委員会　委員長：逸見勝亮（北海道大学）
アドバイザー
企画WG　主査：尾崎文代（広島大学）
国際連携WG　主査：内島秀樹（金沢大学）
技術サポートWG　主査：前田信治（大阪大学）

どう変わる？

あの人に聞きたい！

新体制になることでどう変わるのでしょう？企画WG主査の尾崎氏、国際連携WG副査の杉田氏、技術サポートWG主査の前田氏に聞きました。

●DRFはこれまで一つのプロジェクトでしたが、新たな組織としてスタートしました。これまでの研修会を体系化し、リポジトリの持続に最も重要だと考えられているコミュニティ活動もさらにパワーアップするはずです。これからもどうぞよろしくお願いします！（広島大学　尾崎）

●DRFは昨年、オープンアクセスリポジトリ連合（COAR）の設立に協力しました。COARは、とてもゆるやかな、DRFの国際版とも言えるようなコミュニティ。海外のリポジトリ担当者もみな私たちと同じような悩みをかかえています。「どうやって先生方に働きかければいいの？」「著作権のことよくわかんない」これから、海外と、等身大で、手を携えてことにあたっていく機会がさらに増えるものと思います。（北海道大学　杉田）

●わしにはわからん。（小林よしのり風）でも人が増えたからもっと楽しくなるのは確実じゃっ！（大阪大学　前田）

DRF6 session1「これまでの5年間」

機関リポジトリに関しての展望は

地域構築の意義とは
・地域構築の一番いいところは顔の見えるサポートコミュニティ
・実績や流行で終わらせない
地域拠点リーダーと コミュニティの組織体系化

機関リポジトリによる
・新しい情報流通
・新しい図書館
・新しい図書館間協力

機関リポジトリから見た将来構想

IR運動が、大学図書館にもたらした影響を、図書館組織、図書館間連携、専門性、国際化、研修体系の観点から分析し、特に人材育成という視点からのIR運動の評価を行った。
「リポジトリのこの5年、これから の5年」
内島秀樹（金沢大学）

地域共同リポジトリの現状について、運用機関数、アンケート調査の結果、今後の課題について紹介。「しくみだけあってもリポジトリが機能しないのは明らか。共同リポジトリは複数機関リポジトリの共同体だ。」
「地域連携による共同推進：地域共同リポジトリ」
尾崎文代（広島大学）

ROAT（ログ解析）、cuwic（e-science）、UsrCom（システムの構築支援）の紹介。「どんな団体だって入るだけではメリットはない、メリットは自分たちで作るものだ。」
「技術情報の普及と支援ツール開発」
森一郎（千葉大学）

CSI事業これまでの5年間を振り返り、CiNii・研究者リゾルバー・JAIRO・KAKENの新機能、CSI第3期の基本方針について紹介。“Our future is in your hands!” 次世代を一緒に作りましょう！
「次世代学術コンテンツ基盤構築：NIIがめざす近未来」
杉田いづみ（国立情報学研究所）

2月17-18日 DRF-KanNihonkai（金沢大学）

全体プログラム
2/17
＊13:00-13:10 開会
＊13:30-14:30 講演（小山憲司）
＊14:45-15:45 講演（佐藤翔）
＊16:00-16:20 講演（高田良宏）
＊16:20-17:30 ディスカッション
2/18
＊　9:30-11:30 事例報告1～9
＊11:30-11:50 質疑応答
＊11:50-12:00 閉会

講演：
「学術コミュニケーションの現在」
小山憲司
（三重大学）
研究者の情報入手に関する行動を分析。学術環境の変化に伴い、研究者の行動も変化している。「図書館の役割も変化していくはず。」

「リポジトリログ分析による学術情報流通の諸側面」
佐藤翔
（筑波大学）
今回の参加大学を中心としたダウンロード数の調査。「リポジトリは作っただけではコンテンツは来ない、コンテンツがあるだけでは利用者は来ない！」

「研究室に埋蔵されている研究・教育資料公開の試み」
高田良宏
（金沢大学）
学術情報は文献だけではない。研究データ等は研究室に蓄積されており、電子になり便利になったようで、使えない可能性が高い状態。共有のためには。

ディスカッション：大学図書館の役割についての意見交換
杉田茂樹（北海道大学）：サービスと保存は分離の時代。紙媒体出版時代と同じ仕事をしていてはダメなのでは？図書館機能は、書き手と読み手をつなぐ、人と人をつなぐことではないか。
高田先生（金沢大学）：図書館が、広い分野にまたがるつなぎ手となれるのではないか。
内島秀樹（金沢大学）：機関リポジトリはその役割を果たせるか。

事例報告：

1.「HUSCAP? HUSCAP!：4年目を迎えたリポジトリ」
紙谷五月（北海道大学）
IRをきっかけとして、学内に派生的な±関係も

2.「機関リポジトリは図書館活動のなかに」
鈴木雅子（小樽商科大学）
OAは図書館全体マター。Springerトンネル、SCOAP3、BRII…
「IRをIR担当者だけに任せておいてはいけない」

3.「アーカイブズとしての機関リポジトリ」
土屋直之（山形大学）
IRの集成ではなく地域リポジトリとしての共同リポジトリ

4.「新潟大学学術リポジトリ（Nuar）と新潟県地域共同リポジトリ（NiRR）」
高橋昌子（新潟大学）
「機関リポジトリを説明する際、図書館の存在意義と司書の必要性も併せて説明します。学内の認知度、評価が向上します。」

5.「教員の協力率調査：どれだけ論文をもらえたのか/著者同定：同じ著者を名寄せする」
守本瞬（金沢大学）
文献公開勧誘メールの結果集計。着手可能文献約65%（うちGreen約85%、SuperGreen約15%）。着手後の先生からのレスポンス約20%

6.「JAIST学術研究成果リポジトリ事例報告」
寺田美樹（北陸先端科学技術大学院大学）
H20から業績DBベースでオプトアウト制度化、教育研究評議会承認、掲載数員25%→70%

7.「二つの機関リポジトリ」
水上満雄（福井大学）
福井IRを福井共同リポジトリにマージ（メタデータのみ。フルテキストは福井IRへのリンク。）

8.「大学図書館の地域・広域連携と情報発信：リポジトリとデジタル・アーカイブ」
加本純夫（島根大学）
SWANは純SAを目指している。論文書誌情報は外部データからの流用が可能。デジタルアーカイブは単館にとどまらず地域の拠点として。研究と研究対象ソースとの紐付け組織化

9.「九州大学学術情報リポジトリ」
吉松直美（九州大学）
持続可能な機関リポジトリのための人材進化構造講習会開催。演習に次ぐ演習。毎回、円陣！

2月19日 DRF-Tosa（高知工科大学）

「教員評価と機関リポジトリ」
篠森敬三（高知工科大学）
機関リポジトリには、成果物を公開することによって、他の教員・職員・学生にも業績が明らかになってしまうという間接的な教員評価の機能がある。これを教員側が受け入れれば機関リポジトリと教員評価の間で相互作用が働き、機関リポジトリが積極的に推進されていくのではないか。

「機関リポジトリ概論」
土出郁子（大阪大学）
シリアルズ・クライシスによる研究活動への影響から、オープンアクセスの考え方とその一端を担う機関リポジトリの役割・機関リポジトリの基礎知識と構築・運営の手順を講義。「構築・運用のハードルは下がっています。後は、必要性を見極めてやるかどうかを決定するだけ。」

「共同リポジトリ概論」
尾崎文代（広島大学）
一つのサーバに複数機関の教育研究成果等を蓄積・保存する共同リポジトリについて解説。国内外の共同リポジトリの紹介、ShaReの活動、共同構築の意義と今後の展開について。「共同リポジトリとは、中小規模機関のリポジトリ構築を助長し活性化させるコミュニティ。」

全体プログラム
＊13:00-
教員評価と機関リポジトリ（篠森敬三）
＊13:30-
機関リポジトリ概論（土出郁子）
＊14:00-
共同リポジトリ概論（尾崎文代）
＊14:40-
機関リポジトリ事例報告
（徳島大学・鳴門教育大学
愛媛大学・香川大学・高知大学）
＊15:50-
システムの安価な構築方法
（前田信治）
＊16:10- 質疑応答

四国地区で初めての
DRFワークショップ開催！

「システムの安価構築方法」
前田信治（大阪大学）
自力構築・低スペックサーバの勧めについて。学内に眠っている古いPCなどを使って自分でシステムを構築し、リポジトリをきっかけに、新しいことに挑戦してみませんか。

四国地区 機関リポジトリ事例報告
「徳島大学の場合」折原善彦
「鳴教大リポジトリ現況報告」山本豪
「XooNIpsでのリポジトリ構築（愛媛大学）」仙波行茂
「香川大学の場合」岩澤尚子
「高知大学学術情報リポジトリ構築の歩み」小吉百合
これから構築にとりかかる大学から構築済みの大学まで、それぞれの現状報告を行った。構築に至るまでの難しさや試行錯誤、失敗例も具体的に語られた。「地方中小規模の大学からでも教育研究成果の発信ができます。それぞれの大学のそれぞれの機関リポジトリでいいのです。まずは第1歩を踏みだそう！」

2月19日 長崎国際大学機関リポジトリ研修会

機関リポジトリ研修会
「リポジトリの全体像」
長崎国際大学
平成２２年２月１９日

九州では稀な雪の日となった2月19日、すぐ横にハウステンボスの街なみがみえる長崎県佐世保市ハウステンボス町、長崎国際大学にて機関リポジトリ研修会「リポジトリの全体像」が開催されました。

DRFから講師として千葉大学、武内八重子氏がリポジトリ初心者である大半の参加者に分かりやすくリポジトリの紹介を行った後、九州大学から伊東栄典准教授、吉松直美氏、長崎県立大学佐世保校から久保沙織氏、長崎国際大学から飯島芳典氏がそれぞれの事例や取組の紹介を行いました。

久保氏は長崎国際大学の卒業生で凱旋発表ともなり、10月に開始したリポジトリの紹介では「資金は少なく・成果は大きく」をモットーに勉強・勉強の日々であったと力強く発表されました。また、30名以上集まった教員から、リポジトリ・著作権への率直な疑問や学術情報のこれからといった事まで様々な質問が飛び交い、闊達な研修会となりました。

3月2日 Reform報告会 編集部特派員参加報告

全体プログラム
＊13:00～13:40 「REFORMが提言する2020年の大学図書館像」
＊13:40～15:00 講演：デーヴィッド・シュレンバーガー（アメリカ公立大学協会副会長）：「The Future of Libraries and Scholarly Communications」
＊15:10～16:40 討議

「REFORMが提言する2020年の大学図書館像」土屋俊
情報提供主体として希少性の管理から豊かさの管理へ。（これまでは「いかに買うか」、だったのが「いかに多くの中から適切に提供できるか」へ）

「The Future of Libraries and Scholarly Communications」デーヴィッド・シュレンバーガー
1. 図書館ではデジタル資料がもっと増える。この流れは止まらない。図書館はデジタル資料の適切な提供に力を注ぐようになり、物理的な資料の保存はコンテンツのためではなく、単に物理的な保存の役割のみとなっていくだろう。また、その環境の中で大学は彼ら自身による学術成果物のデジタル化にますます価値を見出していくだろう。
2. 現在多くの大学で研究成果の登録を義務化している。これは研究者や大学自身の判断である。ここからわかるように大学は研究成果の可視性を高めることは大学にメリットをもたらすと思っている。
3. 今後大学は研究成果の可視性をもっと求めるようになり、それを実現するために図書館を使いたいと思うだろう。よって図書館はこれらのアクセスを提供し、大学の研究成果の可視性を高めるのにどれだけ貢献しているかでも評価されていくだろう。今後図書館は大学の評判を左右する存在になり得るし、またそれには大学の可視性をどれだけ高められるかにかかっている。
4. **だから、図書館の未来は明るい！**

特集2 Springerトンネルってトンネル？ ～オープンアクセスのバリエーション

UCバークレイ研究効果増進事業（BRII）

アメリカのカリフォルニア大学バークレイ校の試験的プロジェクト（2008.1-2009.6）。

バークレイ校の構成員（教員・ポスドク・院生など誰でもOK）が論文を雑誌に投稿するときに、BRII（Berkeley Research Impact Initiative）に申請して認可されれば、雑誌に掲載された論文をオンラインで無料公開（＝Open Access化）するための費用が助成されるというものです。OA誌への投稿料（上限は1本3,000ドル）、もしくは非OA誌への投稿論文をOA化する経費（上限は1本1,500ドル）が助成の対象です。助成金のスポンサーは図書館と研究担当学長で、予算は100,000ドルが計上されました。

結果として、プロジェクト期間中に52本の論文がOA化され、予算の7割を消化、そのうち約60%がOA誌への投稿料負担に充てられたということです。

BRIIプロジェクトは学内の研究者からは好意的な反応を得ており、研究者へのOA普及のよい機会となっているということでした。バークレイ校では、BRIIプロジェクトで得られた研究活動のデータを活かし、今後の持続的なOA化支援につなげていきたいとしています。
http://www.lib.berkeley.edu/brii/
（北海道大学附属図書館 城恭子）

左　UC Berkeley Bioscience & Natural Resources LibraryのBeth Weil館長と筆者

出版社が提供するOAサービス

学術雑誌出版社のSpringerは、2004年からOpen Choiceという有償のオープンアクセスサービスを提供しています。これは、Open Choiceを選択した著者が一定金額を出版時に支払うことで、オンライン版の論文全文を公開できる、というものです。他の大手出版社でも類似のサービスを行っています。

海外では、Springer社の電子ジャーナル契約の際に、このOpen Choice料金を含めた「包括契約」を試行している大学や研究機関があります。購読機関の研究者は、一定の制約はあるもののOpen Choice料金を支払うことなくOAを実現できるというわけです。上記のカリフォルニア大学のほか、オランダのコンソーシアム等で行われていて、Leo Waaijers氏は2009年10月のDRIVER Confederation Summitにて、この包括契約を**“Springer Tunnel”**と呼んでいます。Springerトンネルの効果については、現在も検討が続けられています。

オープンアクセスは、図書館業務の様々な局面に関係する話題なのですね。

おや、なにやら話し声が。

つくばリポジトリ公式キャラクターに扮して広報活動。左から **ちゅーりっぷさん**（大澤さん）と **がまじゃんぱー**（真中さん）→

が えっ、トンネル？　筑波山のトンネルなら知ってるけど？
ち この間、ケーブルカーに乗ったときのトンネルね？
が そう。周りがちょっと暗くなって、その後、急にぱぁーっと光がさしてきて、なんだかわくわくしたんだ。
ち Leoさんは、Springerトンネルもそんな光をもたらすオープンアクセスの近道だよ、と言っているのね。
が Springerトンネルの絵を描いてみたよ。
ち なぁんだ分かってるじゃない。え、し、死にそうな努力？？？　そうそう、ケーブルカーに乗るときは「お金」がいるの。狸さんに貰った木の葉じゃだめよ。
が 知ってるよう。木の葉は冗談だってば！！でも，Springerトンネルってうまくいくのかなぁ？

OAへの死にそうな努力
越え難い山
サブスクリプションの国
コモンズの国
直行ルート
シュプリンガーが掘ったトンネル
↓リポジトリ業務に勤しむ中山さん

（筑波大学附属図書館 大澤類里佐、中山知士、真中孝行、徳田聖子 /協力 小樽商科大学附属図書館 杉田茂樹）

SCOAP³今どうなっているの

高エネルギー物理学分野の文献のオープンアクセス化を目指すコンソーシアムSCOAP³（Sponsoring Consortium for Open Access Publishing in Particle Physics）の参加機関は24カ国で、2010年4月末には、負担率の最も大きな米国（約24%）の経費が確保され、OA誌の刊行に必要な年間経費1,000万ユーロの約70%が確保されました。負担率の約22%を占めるBRICS（ブラジル、ロシア、中国、インド）及び日本のうち、少なくも3カ国がSCOAP³参加の同意に達しつつあると推測されています。
Cf. 参加機関　http://www.scoap3.org/whoisscoap3.html
必要経費の確保　http://scoap3.org/fundraising.html　（東北大学附属図書館 加藤信哉）

進行中 30%
確保済 70%
SCOAP³必要経費の確保状況
平成22年4月27日現在

metrics
.org
.com
OA
$
Big Tank
need control?
（図. 北海道大学附属図書館 山本和雄）

arXiv.orgからの予算支援の依頼

arXiv.orgは言うまでもなく、物理学、数学のプレプリントサーバで、1990年代に大成功を収め、機関リポジトリのモデルとなったシステムです。ところで、考案者であるポール・ギンスバーグ（Paul Ginsparg）の移籍に伴い、arXiv.orgの運営は現在コーネル大学図書館が行っています。しかし、その負担（人件費、運営費）は2010年実績で40万ドルもあり、同図書館の財政を圧迫しています。この負担を分散し、arXiv.orgの長期運営を可能にするため、各国の学術コミュニティに利用統計に基づいた貢献が求められています。我が国に対しては、コーネル大学から国立情報学研究所を通して打診があり、すでに名古屋大学、東京大学などが予算の分担に名乗りをあげています。

負担額は、利用（ダウンロード）件数の上位から、(1)100位まで（利用の55%）、(2)101位から200位（25%）、(3)201位以下（20%）、の3階層に分類され、年間で、(1)は4,000ドル、(2)は3,200ドル、(3)は2,300ドルとなっています。ちなみに日本は15機関が200位に入っています。また、今後は、長期的な持続性の確保のための経済モデルも検討することを表明しています。

arXiv.orgは、京都大学を含めて世界に13のミラーサーバサイトを持ち、対象学問領域の拡大や外部施設でのバックアップ、アーカイブ用リポジトリの開発など、積極的な学術流通支援を行っています。すでに物理学分野では欠くことのできないコミュニケーションツールであり、その持続は研究者だけでなく図書館コミュニティにとっても重要な課題です。なお、詳しい情報は http://arxiv.org/help/support/ を参照ください。　（金沢大学情報部 内島秀樹）

あの人に聞きたい！

土屋俊（DRFアドバイザー・千葉大学文学部）

OAをめぐるひとつの戦場は、依然として“金色派”対“緑色派”の論争であるが、これは、理念ではなく、戦略、戦術に関するものである。金色派は、出版モデルを変革してオープンアクセスな学術雑誌を刊行することを当面の目的と考えるのに対して、緑色派は、現行の出版モデルには手をつけないで著者のセルフ アーカイブによってオープンアクセスをまず実現しようとする。前者の代表的 プロジェクトは、PLoSであり、後者の代表的論者はスティーヴン・ハーナッドである。既存の出版者（会社、学会）は前者の立場でも経営は可能であると考え、OA雑誌を創刊、買収したり、論文単位でオープンアクセス化料をとるなどのモデルの拡大を行なっているが、機関リポジトリ振興の考え方は後者の立場とより整合的であるが、紀要の電子化提供などは前者の立場に近いともいえる。論争自体はところを変えつつ止まないが、この対立軸を自覚しておくことは、機関リポジトリ運営者としては重要なことである。

DRF地域ワークショップ（東北地区）

東北大学（平成22年1月7日～8日）

53

＜機関リポジトリ初めの一歩＞
加藤信哉（東北大学）
「機関リポジトリ概論」
片山俊治（東北大学）
「事業戦略」
三上豊（弘前大学）
「事業戦略」
鈴木雅子，吉光紀行（小樽商科大学，山口大学）
「研究者へのアプローチ・模擬説明会」

事例報告
弘前大学　**三上豊**
東北大学　**菅原透**
山形大学　**津田ひろ子**
福島大学　**河野忠市**
札幌医科大学　**今野穂**

長神風二（東北大学）
「研究者の視点から」
森一郎（千葉大学）
「ROAT ＆ UsrCom」
尾崎文代（広島大学）
「ShaRe」
鈴木雅子，阿部潤也，岩澤尚子，杉田茂樹（小樽商科大学，東京歯科大学，香川大学，北海道大学）
「IRcuresILL」
菊池良直（東北大学）
「DRFIC2009報告」
杉田茂樹（北海道大学）
「周辺動向」

講演「機関リポジトリの今」
佐藤義則（東北学院大学）

＜なんでも相談会＞　司会：**尾崎文代**（広島大学）

第6回DRFワークショップ

「これまでの5年間，これからの5年間」
北海道大学（平成22年2月5日）

91

＜これまでの5年間＞
杉田茂樹（北海道大学）
鈴木雅子（小樽商科大学）
前田信治（大阪大学）
斎藤未夏（筑波大学）
内島秀樹（金沢大学）
尾崎文代（広島大学）
森一郎（千葉大学）
杉田いづみ（国立情報学研究所）

＜これからの5年間＞　パネルディスカッション
座長：**土屋俊**（千葉大学）
片山俊治（東北大学）
関川雅彦（筑波大学）
杉山宗武（千葉大学）
内島秀樹（金沢大学）
石井道悦（広島大学）
杉田福夫（北海道大学）

DRF地域ワークショップ（環日本海）

金沢大学（平成22年2月17日～18日）

71

小山憲司（三重大学）
「学術コミュニケーションの現在」
佐藤翔（筑波大学）
「リポジトリログ分析による学術情報流通の諸側面」
高田良宏（金沢大学）
「研究室に埋蔵されている研究・教育資料公開の試み」

パネルディスカッション
座長：**内島秀樹**（金沢大学）
話題提供：**杉田茂樹**（北海道大学）

環日本海域のリポジトリ事例報告
北海道大学　**紙谷五月**
小樽商科大学　**鈴木雅子**
山形大学　**土屋直之**
新潟大学　**高橋昌子**
金沢大学　**守本瞬**
北陸先端科学技術大学院大学　**寺田美樹**
福井大学　**水上満雄**
島根大学　**加本純夫**
九州大学　**吉松直美**

DRF地域ワークショップ（四国地区）

高知工科大学（平成22年2月19日）

29

藤森敬三（高知工科大学）
「教員評価と機関リポジトリの相互作用」
土出郁子（大阪大学）
「機関リポジトリ概論」
尾崎文代（広島大学）
「共同リポジトリ概論」
前田信治（大阪大学）
「システムの安価な構築方法」

事例報告
徳島大学　**折原善彦**
鳴門教育大学　**山本豪**
愛媛大学　**仙波行茂**
香川大学　**岩澤尚子**
高知大学　**小吉百合**

DRF International Conference 2009

Open Access Repositories now and in the future - from the global and Asia-Pacific points of view
東京工業大学（平成21年12月3-4日）

174

土屋俊（千葉大学）
「What now？：Beyond publishing and libraries」
安達淳（国立情報学研究所）
「A Retrospective of NII Projects on New Perspectives in CSI」

＜成熟と展望：電子環境下の科学・研究・出版＞
座長：土屋俊（千葉大学）
Salvatore Mele (CERN)
「高エネルギー物理学における学術情報流通のイノベーション」
Alicia López Medina (COAR/UNED)
「データ中心科学のためのデータリポジトリ・インフラ」
David Shulenburger (Association of Public and Land-grant Universities)
「研究成果の展開・普及のために不可欠なリポジトリの役割」

＜アジア太平洋地域における機関リポジトリの現状と展望＞
座長：竹内比呂也（千葉大学）
Peter Sefton (University of Southern Queensland)
「高エネルギー物理学における学術情報流通のイノベーション」
Simon C. Lin, Ya-Ning Chen (Academia Sinica)
「データ中心科学のためのデータリポジトリ・インフラ」
内島秀樹（金沢大学）

＜ポスターセッション＞　座長：岩井雅史（信州大学）
日高真子　力石浩孝　鈴木雅子　高久雅生　平川正人　岩井雅史　池尻亮子　佐藤翔　行木孝夫　馬場謙介　宇陀則彦　守本瞬　杉田茂樹　斎藤未夏　野中雄司　大園岳雄

＜多様性への姿勢＞　座長：栗山正光（常磐大学）
Susan Gibbons (University of Rochester)
「文献提供者を理解し、よりよいリポジトリをデザインする」
Simon Bevan (Cranfield University)
「アドヴォカシー、コンテンツ獲得、そして研究プロセスにおけるリポジトリ」
佐藤翔（筑波大学）
「機関リポジトリにおけるワーキングペーパーの利用にRePEcが与える影響」
鈴木雅子（小樽商科大学）
「IRとILLを交差させる」
谷藤幹子（物質・材料研究機構）
「NIMS eSciDoc における e-Science 展開」
David Palmer (University of Hong Kong)
「ResearcherPages」機関の方針に対する研究者の賛同を獲得」

デジタルリポジトリ連合運営委員会

（平成22年5月26日現在）

石井道悦（広島大学図書館副館長）
入江伸（慶應義塾大学メディアセンター本部課長）
内島秀樹（金沢大学情報部情報企画課長）
片山俊治（東北大学附属図書館事務部長）
杉田茂樹（小樽商科大学学術情報課長）
杉山宗武（千葉大学情報部学術情報課長）
関川雅彦（筑波大学附属図書館副館長）
逸見勝亮（委員長・北海道大学附属図書館長）